

エルヴェシウス著『人間論』の刊行と改竄

— 書誌学上の諸問題とその政治的・国際的背景 —

永 治 日 出 雄

(愛知教育大学)

Ⅰ 『人間論』初版の刊行とその政治的・国際的背景

クロード・アドリアン・エルヴェシウス(Claude-Adrien HELVETIUS)の著作は思想史および教育史において注目すべき作品と評価されるが、書誌学上は複雑で重大な問題を孕んでいる。エルヴェシウス研究の第一人者D・W・スミスによれば、1795年刊行のL・ラロッシュ校閲『全集』は、最良の版本とながく信じられてきたものの、いくつかの偽作と大規模な改竄を含む。こうした問題はエルヴェシウスの遺作『人間論——人間の知的能力と教育』(以下これを『人間論』と略記する)をめぐってとくに深甚であり、同書初版と上記『全集』の間には推算ながら実に3万語の異文が存在する。⁽¹⁾

苛烈な言論弾圧を招いた彼の処女作『精神論』も、思想史の研究者にとって興味深い対象であるが、『人間論』の校異を主題とする本稿ではとくに立ち入らない。ただし、『精神論』がパリ高等法院によって発禁・焚書の判決を受け、著者自身も宮廷の要職から追放されたこと、そうした苦難が生前における『人間論』公刊を彼に断念させたことだけは、本稿の前提として誌しておく。

1771年12月26日エルヴェシウスは痛風のため57歳で急死し、未刊の著作として初期の試作『幸福』と第二の大著『人間論』が遺された。哲学詩『幸福』はサン・ランベールによるエルヴェシウス小伝を付して、翌年夏頃に刊行された。ダランベールがフリードリッヒ2世に送付した1772年8月22日付書翰によれば、『幸福』よりはるかに重要な作品、『精神論』を敷衍する作品も印刷に付されたと人々は噂している。⁽²⁾

カミングによる本格的な学術書、『エルヴェシウス——彼の生涯と教育思想史上の位置』をはじめ、大抵の書目では『人間論』初版の刊行が1772年と記録されている。しかし、諸版本の様相と所在を網羅的に調査したスミスは、1772年刊と印刷された『人間論』をいまだ発見できないと報告した。⁽³⁾ヨーロッパ各地の大学や図書館でエルヴェシウスに関する史料を渉猟した筆者自身も、スミスと同じ心証を抱いている。

検証の可能な諸版本のなかでもっとも古い『人間論』は、1773年に公刊された12折判2巻本である。本稿の論述ではこれを『人間論』初版として扱う。扉頁では刊行地がロンドンと偽称され、発行元は活版印刷協会と刷られている。実際にはこの印刷所もフランス東北部の高地ブーヨンで営まれていた。国境に近いブーヨンはリエージュなどとともにも秘密出版の拠点であり、同協会のロビネは最晩年のエルヴェシウスと接触をもった。⁽⁴⁾

一般に伝えられるところでは、『人間論』初版の印刷はアムステルダムの出版業者レーが主として請け負った。そして、エルヴェシウスの遺作を管理するラ・ロッシュ、ならびにエカテリーナ2世の命を受けたロシアの名門貴族ゴリーチンが、レーによる印行を監督した。初版の冒頭を飾るのは、刊行者からロシア女帝に捧げた「献辞」である。フリードリッヒ2世やエカテリーナ2世など開明的な君主に自作を献ずることは、エルヴェシウスの筆になる同書「序文」で明記されており、著者自身が生前に当時の駐フランス大使ゴ

リーチンとなんらかの交渉を行なったと察せられる。なお、『人間論』刊行への後援を約束したロシア女帝は、全巻のゲラ刷りが届けられた1773年6月末に、論述の内容をあらためて確認し、「献辞」の挿入を最終的に容認した。⁽⁵⁾

折しもエカテリーナ2世の招聘を受けたディドロは、ロシアへの旅路で駐オランダ公使ゴリーチンの屋敷に投宿し、3ヵ月間ハーグに滞在した。デピネ夫人に宛てた1773年8月18日付書翰によれば、彼はオランダでエルヴェシウスの遺作を入手し、綿密な覚書をそこに書き込みつつある。なお、ハーグに駐在するフランス大使ノアイユは、『人間論』の「序文」と「献辞」に危惧を抱き、同年9月14日その内容を外務長官エギヨンに急報する。こうして『人間論』刊行に向けたロシア政府の支援は、国際的な物議を惹き起し、フランス外務省は駐ロシア大使デュラン・ド・ディストフに急拠訓令を発した。⁽⁶⁾

拝啓。『人間論 — 人間の知的能力と教育』と題してオランダで印刷された著作のなかで、仏露両国の君主および国民が猛々しく蹂躪し合うかの如く描かれていることを、貴下もとくに憂慮されよ。由々しいと思われる箇所を転写して書翰に同封したので、この著者が極度の放縦に走り、錯乱にすら陥ったことを理解されるであろう。

こうした書物も秘密出版であれば、軽蔑を投げかけるだけで済む。だが、これはロシア女帝の後援で刊行され、女帝に献げられている。ハーグに駐在するロシア公使ゴリーチンも同書の冊子を数多配布し、わが国の大使にも一部をいわば無理強いした。

このような事態に鑑みてフランス国王が沈黙を続けるわけにはいかない。かくも猥雑な著作をみずからの後援によって出版させたこと、また同書の配布を自国の公使が行なったことについて、ロシア女帝に公的な抗議を表明するよう、国王陛下が責務を貴下に授けられる。〔中略〕

フォンテーヌブロー、1773年10月19日 〔外務長官〕 エギヨン公爵⁽⁷⁾

こうしたフランス政府の憤懣に対してエカテリーナ2世の態度はきわめて冷やかである。エルミタージュ宮の応答によれば、『人間論』公刊と献呈に女帝はなんら関知せず、かつ同書の論述ではフランスの専制政治よりむしろ後進国ロシアが誹謗されている。⁽⁸⁾

II 『人間論』諸版本の形態と特色

エルヴェシウスの著作は厳しい出版統制や社会状況にも拘らず、種々の版本として上梓され、フランスをはじめヨーロッパ諸国に広く流布した。それらの大半は秘密出版あるいは歿後の印行であり、著者自身の手稿が早くより散佚した事情も重なって、さまざまな変貌や混乱を伴っている。ここではスミスの精力的な検証を手掛りとしつつ、エルヴェシウス著『人間論』と同書を収録した『全集』・『著作集』について略述する。⁽⁹⁾

- 1 De l'Homme, de ses facultés intellectuelles et de son éducation, Londres, Société Typographique, 1773. 12折版、全2巻。本文は第1巻 639頁、第2巻 760頁。本稿ではこれを『人間論』初版 Hh1773α と略記する。この版本を有する公共の研究機関としてスミスはフランス国立図書館など15を挙げているが、筆者の調査によれば、ジュネーヴ公共・大学図書館にも所蔵されている。
- 2 De l'Homme, Londres, Société Typographique, 1773. 12折判、全2巻。初版とは組版を異にし、厳密にはこれをさらに2種の版本に区別できる。
- 3 De l'Homme, Londres, Société Typographique, 1773. 12折判、全2巻。ヨーロッ

バの古書店ではこれら2と3もときに初版として現れる。

- 4 De l'Homme, Amsterdam, 1774. 8折判全3巻。
- 5 De l'Homme, Londres, Société Typographique, 1774. 12折判、全2巻。
- 6 Oeuvres complètes, Liege, Bossonpierre Pere & Fis, 1774. 8折判、全4巻。最初の『全集』であり、『人間論』初版との異文は少い。東京大学にも蔵されている。
- 7 Oeuvres complètes, Londres, 1775-1776. 8折判、全4巻。
- 8 Oeuvres complètes, Londres, 1776-1777. 8折判、全4巻。
- 9 Oeuvres complètes, Londres, 1777-1778. 12折判、全5巻。
- 10 Oeuvres complètes, Londres & Genève, Didier, 1780. 12折判、全5巻。
- 11 Oeuvres complètes, Londres, 1781. 4折判、全2巻。『全集』Ho1781 α と略記する。スマスはもっとも美麗で、得難い希観本と評するが、筑波大学にも蔵されている。
- 12 Oeuvres complètes, Londres, 1779-1781. 8折判、全5巻。『全集』Ho1781 α と同じ内容であるが、区別して『全集』Ho1781 β と略記する。
- 13 Oeuvres complètes, Deux-Ponts, Sanson, 1784. 12折判、全7巻。『全集』Ho1784と略記する。
- 14 Oeuvres philosophiques, Londres, 1784-1791. 12折判、全7巻。
- 15 Oeuvres, Paris, Servieres & Bastien, 1792. 8折判、全5巻。
- 16 De l'Homme, Londres, Société Typographique, 1792年。12折判、全4巻。
- 17 Oeuvres, Paris, Briand, [1793-1794]. 8折判、全5巻。
- 18 Oeuvres complètes, Paris, Dugour & Garnéry, 1793-1797. 12折判、全10巻。
- 19 Oeuvres complètes, Paris, Didot, 1795. 12折判、全14巻。ラ・ロッシュが校閲し、「まえがき」を添えている。『全集』Ho1795 α と略記する。
- 20 Oeuvres complètes, Paris, Servieres, 1795. 8折判、全5巻。名古屋大学にも所蔵される。
- 21 Oeuvres complètes, Paris, Lepetit, 1818. 8折判、全3巻。優れた版本とされるが、『全集』Ho1795 α を踏襲し、混迷を一層深めている。『全集』Ho1818と略記する。
- 22 Oeuvres complètes, Paris, Dalibon, 1827. 8折判、全2巻。収録されるのは『精神論』だけであり、当初の出版企画が挫折したと思われる。
- 23 Oeuvres complètes, Paris, Didot, 1795. [Hildesheim, Georg Olms, 1967.]
12折判、全14巻。『全集』1795 α の復刻であり、ブラヴァルの卓越した解題が付されている。かつて日本で『全集』Ho1795 α を所蔵するのは、一橋大学のみであったが、現在では多くの大学にこれが配備されている。復刻版はHoR1967と略記する。
- 23 De l'Homme, Paris, Fayard, 1989. 8折判、全2巻。単行本としては2世紀ぶりの公刊。G・ムトーとJ・ムトーによって初版が復元され、『人間論』の綿密な読解が広汎な読者層に可能となった。ただし、この版本には解題、校異、校註がほとんどなく、現代の編纂事業としては強い不満を感じさせる。『人間論』Hh1989と略記する。

また、日本では根岸国孝によるエルヴェシウスの翻訳が2度公刊された。『人間論(上)』日本評論社、1949年。および『人間論』明治図書、1966年。原典第3篇までの全訳である前者をエニネ1949、全巻の抄訳である後者をエニネ1966と略記する。なお、これらの邦訳では『全集』1781 β ならびに『全集』1784が典拠とされている。

なお、1959年にベッスは解題と校註を伴う『人間論(抜粋)』の上梓を予告し、また1973年にスミスなどカナダ人研究者グループも、厳密な校閲を経た『エルヴェシウス全集』の企画を披露したが、現在のところ美事な『書翰全集』の刊行だけに止まっている。書誌学上の難題が数多潜在し、考証や校異に莫大な労苦を要するためと思われる。(10)

Ⅲ 『人間論』改版・改竄の特徴

ラ・ロッシュ校閲『全集』1795αは2世紀にわたってエルヴェシウスに関する定本とされてきた。精緻なエルヴェシウス評伝の著者カーンはこれを最良の編纂と讃え、『精神論(抜粋)』の周到な編者ベッスも『全集』1795αと『全集』1818を優秀な版本として推奨する。(11)ラ・ロッシュ自身も1795年の公刊にあたりつぎのとおり明言した。

エルヴェシウスの著作ほど頻繁に再版されるものは数少い。彼が造ったものを、人々は変形させる。彼に属していないものを、人々は彼に与える。〔中略〕

『人間論』は彼の歿後に印行されたが、用いられた稿本は1767年にニュールンベルクの学者に送られたものである。その稿本を翻訳させて、まずドイツで出版しようとの意図であった。頑迷固陋な専制政治が執筆者に新たな迫害を加えないよう、それが適切な方途と思われた。だが、翻訳を完成するまえに、学者は世を去った。どんな経緯によるか判らないが、そうした稿本に基づいて『人間論』初版が印行され、それに便乗した沢山の版本がフランスと全ヨーロッパに流布した。偽造者の無知と食欲がそれらの版本に無数の誤謬を添付している。稿本をドイツに送ったあとも、エルヴェシウスは作品の修正と推敲に努めた。補遺の多くが削除されたり、本文に編入された。いくつかの章にも全体的な再編や除去がなされた。彼の著作を今日公衆に供するのは以上に述べた原状、遺作として私に託された際の原状のままである。〔中略〕

オートウユにて、共和暦3年第6月12日　　ラ・ロッシュ (12)

ラ・ロッシュはエルヴェシウス最晩年の親密な友人であり、歿後における著作の管理をも依頼されていた。また、1772年からエルヴェシウス夫人が転居先のオートウユで文芸サロンを再開すると、その邸宅に寄寓するラ・ロッシュはたえず女主人の補佐役を勤めた。1800年に彼女は世を去るが、感謝の意を籠めて家具などがラ・ロッシュに遺贈される。このようにエルヴェシウス夫妻から篤く信頼された人物の校閲が、権威あるものとみなされたのは当然である。(13)

しかし、『全集』1818の編纂者は『全集』1795αに依拠しながらも、ラ・ロッシュによる改竄を幽かに感知した。また、定評ある書誌辞典『文芸フランス』の著者ケラールは、ドイツ人に送ったという『人間論』草稿の実在を疑っている。(14)

『全集』1795αの復刻版は1967年に刊行され、これを契機にラ・ロッシュの編纂がスミスによって鋭い批判を浴びた。後者の推論によれば、「イギリスの憲法について」と題して『全集』1795αで初出するラ・ロッシュ宛書翰は偽作であり、モンテスキュー宛およびヴォルテール宛書翰の若干にも疑惑が抱かれる。なおまた、スミスはブリュッセルで催されたエルヴェシウス歿後2百年記念国際研究集会において、『全集』1795αの『人間論』には無数の改竄が見出されると道破した。(15)

こうしたスミスの史料批判を基礎としながら、ここで『人間論』の改版・改竄を具体的に検証したい。別掲の【校異】は三種の主要な版本を照合し、異文のどくに際立つ章節を

摘記したものである。なかでも章全体を収録した【校異Ⅲ】は、改竄の形態・内容・規模を明瞭に示すであろう。なお、この種の照合は書誌学的研究の中核的な要素であり、本稿の論旨を充分把握するには、煩瑣でも別掲の【校異】を頻繁に参照されるよう切望する。

改竄の形態には顕著な特徴がいくつか認められる。すなわち、(1) 初版1773αの論述を削除したものが異文の大半であり、除去された箇所のは大半は数行にわたる文であって、ときにはひとつの段落全体に及ぶ。(2) 『全集』1781αと『全集』1795αにおける加筆・修正はほとんど字句の規模でなされ、固有名詞等に関連する場合は別として、文意には微弱な変化しか与えない。(3) 改版・改竄はすでに『全集』1781αで本格的に行なわれ、基本的な路線がその時点で敷かれている。『全集』1795αにおける異文はこれを増幅・拡大したものにすぎない。(4) 初版1773αを基点とすれば、エルヴェシウスの論述は『全集』1781αよりも『全集』1795αにおいて一層多量に削除されている。また、『全集』1781αで除去され、『全集』1795αで復元された部分は皆無である。

以上のように異文の形態を認識するとき、『人間論』改竄の意図と背景を突き止めるには、1781年の時点まで遡ることが必要と感じられる。スミスの峻厳な史料批判においても、『全集』1795αでの改竄に重点が置かれ、『全集』1781αの編纂については手短かな言及しかない。⁽¹⁶⁾なお、ふたつの『全集』に認められる改竄の連続性と同質性は、いずれも同一の人物または集団によって遂行されたことを推論させる。

つぎにこれら異文の内容的な特徴を論述の順序に沿って列挙してみよう。【校異Ⅰ】から読み取れるとおり、エカテリーナ2世を讃美する「献辞」が『全集』1781αと『全集』1795αにおいて削除された。また、「序文」に付せられた校註を通して、頽廃した祖国フランスへの悲嘆、ロシアやプロシアの啓蒙君主に対する讃美が鎮静されている。エルヴェシウス自身が「献辞」を書いたとは断定し難く、この部分の削除を改竄と呼ぶことできない。しかし、校註の文言とともに「献辞」の削除は『人間論』読解を特定の方向へ確かに誘導する。なお、これらの『全集』では異様にも校註が「序文」にのみ添えられている。

【校異Ⅱ】として挙げた第1篇補註(10)はイエズス会を批判した記述である。この別掲で①と③を比較しただけでも、『全集』1795αに対する初版1773αの優位が明確に認められる。第一の文しか留めない『全集』1795αは、その補註自体を無意味にしている。因みにディドロは『〈人間論〉への反駁』で補註(10)にを論評したが、『全集』1795αだけを参照するかぎり、標的とされたエルヴェシウスの主張がほとんど把握できない。⁽¹⁷⁾

【校異Ⅱ】④の記述はフェミニズムの先駆としてしばしば評価される。この記述に関して『全集』1781αと『全集』1795αでは、エカテリーナ2世等の人名が普通名詞に置き換えられる。文意の著しい転換へは導かないとしても、このような修正は『人間論』の史料的価値を半減すると考えられる。エカテリーナ2世という固有名詞の抹消によって、女帝に対するエルヴェシウスの評価や関係が闇に隠されるからである。同書「献辞」の削除が、同じような結果を招くことは言うまでもない。

【校異Ⅲ】を構成する第10篇第8章については、『全集』1781αで多大の削除が施され、『全集』1795αに至るとさらにそれが増幅・拡大する。教育の非宗教化は『人間論』における重要な提唱のひとつであり、教育改革と教権排除の関連を論じたこの章は全巻の頂点とも言える。ラ・ロッシュによる改竄の意図はカトリック教会への攻撃を緩和するところであり、教育の近代化を促すエルヴェシウスの著名な言葉、「聖職者に公民の教育を

委ねる国民は不幸である！」もこれらの『全集』では削り取られる。

IV 『人間論』改竄の政治的・国際的背景

エルヴェシウスの歿後このような改版・改竄がおそらくラ・ロッシュを中心として進められた。こうした操作の背景としてアンシアン・レジームの出版統制や革命時代の政治状況が勿論存するが、より個別的な契機について筆者は若干の推論を提起したい。

『人間論』刊行に対するエカテリーナ2世の支援が、学芸の奨励という理念だけでなく、巧妙な対外政策から発したことは勿論である。ロシアへの〈哲学者たち〉招聘も一面ではヴェルサイユ宮への対抗意識に支えられていた。エルヴェシウスの遺稿を預かるラ・ロッシュは啓蒙君主一般に疑いを抱くとともに、ロシア女帝の野心と介入を内心では嫌悪したと思われる。初版の刊行に関与しながら、矛盾に満ちた『全集』1795α「まえがき」で初版の真価を否認し、のちに独自の編纂においてエカテリーナ2世への「献辞」と称讃を削除した理由がそこにある。

さて『全集』1781αおよび『全集』1795αで削除された文章の過半は、カトリック教会を批判した論述である。1774年1月10日にパリ高等法院は『人間論』を審理に付し、4頁の簡略な判決文で発禁・焚書の処分を言い渡した。『精神論』弾圧の際と同じく、ここでもエルヴェシウスの宗教批判が最大の罪状とされている。⁽¹⁸⁾また、1759年から革命の勃発まで彼の著作がすべて秘密出版にされた事実は、〈哲学者たち〉を囲む状況が依然として苛酷であったことを語る。カトリックへの攻撃を抑制し、厳しい出版統制を乗り切るため、ラ・ロッシュが『人間論』の激烈な部分を改竄した可能性は高い。

しかしながら、思想弾圧の体制が崩壊した革命後、奇妙にも宗教批判への削除が『全集』1795αのなかで倍加している。ベネドクト派の主任司祭という経歴は有するものの、ラ・ロッシュは自由闊達な気風を愛し、カバニスなどイデオログとともに革命の事業を推進した。1793年に彼はマラー糾弾の容疑で逮捕され、ロベスピエール派の権力失墜のあとようやく釈放される。ラ・ロッシュがオートウユの文芸サロンに復帰し、『全集』を公刊した1795年に、共和暦第3年憲法と總裁政府が成立した。このように錯綜する状況のなかでカトリック攻撃の緩和がどんな政治的意義をもつかを、今後解明すべきであろう。⁽¹⁹⁾

ところで、『全集』1795α「まえがき」の末尾でラ・ロッシュが、自己の所在についてオートウユと明記した事実を、慧眼なスマスも看過している。ブーローニュ近くのオートウユ、ほかならぬエルヴェシウス夫人の邸宅において膨大な改竄を含む『全集』が編纂されたことになる。著者の遺族のもとに寄寓する人物が、はたして編纂や改竄を独断で行なうであろうか。『全集』1795αに関してはもとより、『全集』1781年αについてすらもエルヴェシウスの遺族がなんらかの形で編纂に関与した、と筆者は推測したい。そして、端麗で貞節で気丈なエルヴェシウス夫人が同意や黙認を与えたとすれば、『人間論』改竄を促すきわめて重大な事由が、1781年の時点から存在したと思われる。

なお、以上に挙げた校異のほか、『人間論』ではイギリスの政治を称讃した箇所も、多量に削除されている。また、偽作と疑われる前述のラ・ロッシュ宛書翰等は、主としてイギリスを批判した叙述である。⁽²⁰⁾この種の改竄と偽作にはアメリカ独立をめぐる複雑な国際情勢、なかでもフランクリンの数次にわたるフランス滞在に係わると筆者は推測するが、史料に基づく論証は他日の機会に譲りたい。

【『人間論』校異 I】

献辞および序文

試訳における下線部分はつぎの種類の異文を示す。
 Ho1795 α 固有の加筆 Ho1795 α 固有の削除

Ho1781 α と Ho1795 α に共通する加筆
 Ho1781 α と Ho1795 α に共通する削除

DE L'HOMME (PREMIERE EDITION DE 1773)
 『人間論』(初版 Ho1773 α)
 (DEDICÉ (ENTIER)) ①
 A SA MAJESTÉ IMPÉRIALE
 TRÈS-HAUTE ET TRÈS-AUGUSTE PRINCESSE
 CATHERINE II
 IMPÉRATRICE DE TOUTES LES RUSSIES,
 PROTECTRICE DES ARTS ET DES SCIENCES ;
 DIGNÉ PAR SON ESPRIT
 DE JUGER DES ANCIENNES NATIONS,
 COMME ELLE EST DIGNÉ DE GOUVERNER LA SIENNE.
 OFFERT TRÈS-HUMBLEMENT PAR L'ÉDITEUR

PREFACE (EXTRAIT) ⑥
 Ma Patrie a reçu enfin le joug du Despotisme.
 Elle ne produira donc plus d'Ecrivains célèbres.
 Le propre du Despotisme est d'étouffer la pensée
 dans les esprits & la vertu dans les ames.
 Ce n'est plus sous le nom de François que ce
 peuple pourra de nouveau se rendre célèbre ;
 cette Nation avilie est aujourd'hui le mépris
 de l'Europe.
 Le Ciel du Nord chaque jour s'éclaire & se
 purifie. Les Catherines II, les Frédéric, s
 veulent se rendre chers à l'humanité ; ils
 sentent le prix de la vérité; ils encouragent à
 la dire; ils estiment jusqu'aux efforts faits
 pour la découvrir. C'est à de tels Souverains
 que je dédie cet Ouvrage. C'est par eux que
 l'Univers doit être éclairé.

SOURCES: Hh1773 α. tome I, pp. II, IX, XI-XII.
 cf. Hh1989, tome I, pp. 7, 11-12.

DE L'HOMME (OEUVRES COMPLETES DE 1781)
 『人間論』(『全集』Ho1781 α)
 ②

PREFACE (EXTRAIT) ⑥
 Ma patrie a reçu enfin le joug du despotisme;
 elle ne produira donc plus d'Ecrivains célèbres.
 Le propre du despotisme est d'étouffer la pensée
 dans les esprits & la vertu dans les ames.
 Ce n'est plus sous le nom de François que ce
 peuple pourra de nouveau se rendre célèbre:
 cette * nation avilie est aujourd'hui le mépris
 de l'Europe.
 Le Ciel du Nord chaque jour s'éclaire & se
 purifie. Les Catherines II, les Frédéric, s
 veulent se rendre chers à l'humanité ; ils
 sentent le prix de la vérité; ils encouragent à
 la dire; ils estiment jusqu'aux efforts faits
 pour la découvrir. C'est à de tels souverains
 que je dédie cet Ouvrage. C'est par eux que
 l'univers doit être éclairé.
 * Il faut faire attention que l'Auteur
 écrivait cette préface un an avant sa mort,
 dans l'époque de beaucoup de changements dans la
 monarchie.

SOURCES: Ho1781 α. tome II, pp. iii-iv.

DE L'HOMME (OEUVRES COMPLETES DE 1795)
 『人間論』(『全集』Ho1795 α)
 ③

PREFACE (EXTRAIT) ⑦
 Ma patrie a reçu enfin le joug du despotisme;
 elle ne produira donc plus d'écrivains célèbres.
 Le propre du despotisme est d'étouffer la pensée
 dans les esprits et la vertu dans les ames.
 Ce n'est plus sous le nom de François que ce
 peuple pourra de nouveau se rendre célèbre ;
 cette nation avilie est aujourd'hui le mépris de
 l'Europe. *
 le ciel du nord chaque jour s'éclaire et se
 purifie. Les Catherines II, les Frédéric, s
 veulent se rendre chers à l'humanité * * ; ils
 sentent le prix de la vérité; ils encouragent à
 la dire; ils estiment jusqu'aux efforts faits
 pour la découvrir. C'est à de tels souverains
 que je dédie cet Ouvrage. C'est par eux que
 l'univers doit être éclairé.
 * Il faut faire attention que l'auteur
 écrivait cette préface un an avant sa mort,
 dans l'époque de beaucoup de changements dans la
 monarchie.
 * * C'est au moment que la marche rapide de
 despotisme en France affligéoit Helvétius qu'il
 perloit ainsi des puissances du nord. Les sages
 qui voient le malheur des peuples n'ont d'autre
 moyens d'adoucir la férocité des tigres qui les
 gouvernement qu'en leur offrant la perspective de
 la gloire, et en les encourageant au bien qu'il
 font ou qu'il promettent de faire.

SOURCES: Ho1795 α. tome VII, pp. xiii-xiv, xvi-xvii.
 cf. Ho1967, tome VII, pp. xiii-xiv, xvi-xvii.

試訳:『人間論』(初版 Ho1773 α)
 (下線=『全集』Ho1781 α・『全集』Ho1795 αとの異文)

(献辞(全文)) ④
 至高にして畏れ多き、
 エカテリーナ2世陛下に捧ぐ。
 ロシア全土の女帝、学芸の守護者であって、
 自国を統治する威厳とともに、
 伝説ある諸国民について
 判断する精神をも具備された陛下に。
 恐懼しつつ、
 刊行者。■

序文(抜粋) ⑧
 ついにわが祖国は専制政治の轡に屈した。したがって、もはやここでは卓越した文筆家が育たないであろう。専制政治の本質は精神において思想を、魂において徳を圧殺するところにある。
 わが民族が新たに卓越した存在となることは、フランス人としてはもはやありえない。この醜辱した国民はヨーロッパの侮蔑を今日浴びている。□ * □
 (中略)
 北方の空は毎日に明るくなり、澄んでいく。エカテリーナ2世やフリードリッヒなどが、人類に慈愛深くあろうと望んでいる。□ * □ 真理の価値を彼らは感じている。真理を語るように彼らは奨励する。真理を発見するため、努力を重ねることまでも、彼らは大切にす。そうした君主たちにこそ、私はこの著作を捧げる。彼らによってこそ、世界は啓蒙される。
 (ラ・ロッシュによる校註)
 □ * 著者がこのような序文を書いたのは、逝去する1年前、すなわち君主政治に多くの弊が現れた時期であることに、注意を向ける必要がある。□
 □ * * フランスで専制政治の急速な歩みがエルヴエシウスを苦悩させた時期に、北方の列強についてこのように語った。諸民族の苦難を眺めた賢者たちは、統治する猛獣の残忍さを鎮静する方策として、栄光への展望を差出し、善を行なう人や善行を約束する人に励ましを与えるほかなかったのである。□

cf. エニネ1949, pp. 29-31. エニネ1966, pp. 13-14.

【『人間論』校異Ⅱ】

第1篇補遺・第2篇第12章

『人間論』諸版本の原文は明白な誤植等は別として、復元の可能なかぎり原典の綴字どおり記載した。

<p>DE L'HOMME (PREMIERE EDITION DE 1773) 『人間論』(初版 He1773α)</p> <p>SECTION I NOTES (EXTRAIT) ①</p> <p>(10) Les jésuites offrent un exemple frappant du pouvoir de l'éducation. Si leur Ordre a produit peu d'hommes de génie dans les Arts & les Sciences; s'il n'ont point eu de Newton en Physique, de Racine dans le Tragique, d'Huygens en Astronomie, de Pot en Chymie, de Locke, de Bacon, de Voltaire, de La Fontaine &c, ce n'est pas que ces Religieux ne se recrutassent parmi les Ecoliers de leur Collèges, qui annonçoient le plus de génie. On sait d'ailleurs que les Jésuites dans le silence de leur maisons, n'étoient distraits de leurs études par aucun soin, que leur genre de vie enfin étoit le plus favorable à l'acquisition des talens. Pourquoi donc ont-ils donné si peu d'hommes illustres à l'Europe? c'est qu'entourés de Fanatiques & de Superstitieux, un Jésuite n'ose penser que d'après ses Supérieurs; c'est que d'ailleurs forcés de s'appliquer quelques années à l'étude des Casuistes & de la Théologie, cette étude répugne à la saine raison, & doit la corrompre en lui. Comment conserver sur les bancs un esprit juste? l'habitude de le sophistiquer le fausse.</p>
<p>SECTION II CHAPITRE XII (EXTRAIT) ⑤</p> <p>DE L'INEGALE PERFECTION DES ORGANES DES SENS.</p> <p>Les Femmes, par exemple, dont la peau plus délicate que celle des Hommes, leur donne plus de finesse dans le Sens du toucher, n'ont pas plus d'esprit <a> qu'un Voltaire, que cet homme peut-être le plus étonnant de tous par la fécondité, l'étendue & la diversité de ses talens.</p> <p><a> L'organisation des deux Sexes est sans doute très-différente à certain égards: mais cette différence doit-ils être regardée comme la cause de l'infériorité de l'esprit de Femmes? non: la preuve du contraire, c'est que nulle Femme n'étant organisée comme un homme, nulle en conséquence ne devrait avoir autant d'esprit.</p>

<p>DE L'HOMME (ŒUVRES COMPLETES DE 1781) 『人間論』(『全集』Ho1781α)</p> <p>SECTION I NOTES (EXTRAIT) ②</p> <p>(10) Les jésuites offrent un exemple frappant du pouvoir de l'éducation. Si leur ordre a produit peu d'hommes de génie dans les arts & les sciences; s'il n'ont point eu de Newton en physique, de Racine dans le tragique, d'Huygens en astronomie, de Pot en chymie, de Locke, de Bacon, de Voltaire, de La Fontaine &c; ce n'est pas que ces religieux ne se recrutassent parmi les écoliers de leur collèges, qui annonçoient le plus de génie. On sait d'ailleurs que les jésuites dans le silence de leur maisons, n'étoient distraits de leurs études par aucun soin, que leur genre de vie enfin étoit le plus favorable à l'acquisition des talents. Pourquoi donc ont-ils donné si peu d'hommes illustres à l'Europe? c'est qu'entourés de fanatiques & de superstitieux, un jésuite n'ose penser que d'après ses supérieurs: c'est que d'ailleurs forcés de s'appliquer quelques années à l'étude des casuistes & de la théologie, cette étude répugne à la saine raison, & doit la corrompre en lui. Comment conserver sur les bancs un esprit juste? l'habitude de le sophistiquer le fausse.</p>
<p>SECTION II CHAPITRE XII (EXTRAIT) ⑥</p> <p>DE L'INEGALE PERFECTION DES ORGANES DES SENS.</p> <p>Les femmes, par exemple, dont la peau plus délicate que celle des hommes, leur donne plus de finesse dans le sens du toucher, n'ont pas plus d'esprit <a> qu'un Voltaire.</p> <p><a> L'organisation des deux sexes est sans doute très-différente à certain égards: mais cette différence doit-ils être regardée comme la cause de l'infériorité de l'esprit de femmes? non: la preuve du contraire c'est que nulle femme n'étant organisée comme un homme, nulle en conséquence ne devrait avoir autant d'esprit.</p>

<p>DE L'HOMME (ŒUVRES COMPLETES DE 1795) 『人間論』(『全集』Ho1795α)</p> <p>SECTION I NOTES (EXTRAIT) ③</p> <p>(10) Les jésuites offrent un exemple frappant du pouvoir de l'éducation.</p>
<p>SECTION II CHAPITRE XII (EXTRAIT) ⑦</p> <p>DE L'INEGALE PERFECTION DES ORGANES DES SENS.</p> <p>Les femmes, par exemple, dont la peau plus délicate que celle des hommes leur donne plus de finesse dans le sens du toucher, n'ont pas plus d'esprit qu'un Voltaire. <a></p> <p><a> L'organisation des deux sexes est sans doute très différente à certain égards: mais cette différence doit-ils être regardée comme la cause de l'infériorité de l'esprit de femmes? Non: la preuve du contraire c'est que nulle femme n'étant organisée comme un homme, nulle, en conséquence, ne devrait avoir autant d'esprit.</p>

<p>試訳:『人間論』(初版 He1773α) (下線=『全集』Ho1781α・Ho1795αとの異文)</p> <p>第2篇補遺(抜粋) ④</p> <p>(10) 教育の力についてイエズス会士は顕著な実例を提供している。 〳 学問や芸術に秀でて天才的な人物を、彼らの命令がほとんど輩出しなくとも、物理学におけるニュートンを、劇壇におけるラ・フォンテーヌを、天文学におけるホイヘンスを、化学におけるボットを、またロック、ベーコン、ヴォルテール、ラ・フォンテーヌなどを彼らがまったく擁護しなくとも、コレージュで輝かしい天分の閃きを示す生徒が修道士として徴募されぬわけではない。静寂な僧院に籠るイエズス会士が、どんな心労にも勉学を乱されぬこと、さらにまた彼らの生活様式が優れた才能を身に付けるため、最良の条件であることをも人々は知っている。ではヨーロッパでなぜ彼らが輩出した人物をほとんど輩出しなかつたか。狂信者や迷信家に囲まれてイエズス会士は、長老の導くどおりにしか思考しないからである。かつては法理学や神学を学ぶのに、彼らは数年も余蘊なく専念し、そうした勉学が健全な理性の醸成を待て、やがては彼らの理性を腐敗させるからである。公正な精神を学会のなかでどうして保持できよう。諷刺を弄する習性がそのような精神をねじめる。 〳</p>
<p>第2篇第12章(抜粋) ⑧</p> <p>感覚器官の構組</p> <p>たとえば、男性に較べて女性は、より繊細な肌をもつので、触覚においてより鋭敏であるものの、ヴォルテールほどの精神は発揮できない。<a> 〳 才能の豊饒さ、幅広さ、多様さによっておそらくヴォルテールこそ万人にながでもっと驚嘆すべき人物と思われ。 〳</p> <p>(脚註)</p> <p><a> 両性の身体組織は若干の点で勿論非常に異なる。しかし、女性の精神が劣等である原因を、そうした差異に帰してよいであろうか。よくない。反対のことが実証される。すなわち、男性のような身体組織をもつ女性はひとりもいない以上、男性に匹敵する精神を有する女性もひとりも存在しないはずである。</p>

DE L'HOMME (PREMIERE EDITION DE 1773)
『人間論』(初版 Ho1773α)

Or les Saphos, les Hyppathies, les Elisabeths, les Catherine IIe, &c. ne le cedent point aux hommes en génie. Si les Femmes leur font en général inférieures, c'est qu'en général elles reçoivent encore une plus mauvaise éducation.

SOURCES: Hh1773α, tome I, pp.123-124, tome II, pp. 252-253 cf. Hh1809, tome I, pp.121, 201-202.

DE L'HOMME (OEUVRES COMPLETES DE 1781)
『人間論』(『全集』Ho1781α)

Dependant que de femmes célèbres ne le cedent point aux hommes en génie ! Si elles leur sont, en général, inférieures, c'est qu'en général, elles reçoivent encore une plus mauvaise éducation.

SOURCES: Ho1781α, tome II, pp. 41-42, 84.

DE L'HOMME (OEUVRES COMPLETES DE 1795)
『人間論』(『全集』Ho1795α)

Dependant que de femmes célèbres ne le cedent point aux hommes en génie ! Si elles leur sont, en général inférieures, c'est qu'en général elles reçoivent encore une plus mauvaise éducation.

SOURCES: Ho1795α, tome VII, p.124, tome VIII, pp.16-17, cf. Ho1967, tome VII, p.124, tome VIII, pp.16-17.

訳訳:『人間論』(初版Ho1773α)
(下線=『全集』Ho1781α・『全集』Ho1795αとの異文)

しかしながら、**■** サッフォ、ヒパシウス、エリザベス、エカテリーナ2世、等々は **■** 多くの著名な女性たちは 天才的な男性と較べても遜色ない。かりに女性一般が男性に劣るとしても、それは一般に女性が男性よりも劣悪な教育を授けられるからである。

cf. エニネ1949, 上, pp. 108-109, 183-188, エニネ1966, pp. 93, 96-97.

【『人間論』校異Ⅲ】 第10篇第8章〔全文〕

DE L'HOMME (PREMIERE EDITION DE 1773)
『人間論』(初版 Ho1773α)

SECTION X CHAPITRE VII (ENTIER) ①

INTERET DU PRETRE, PREMIER OBSTACLE A LA PERFECTION DE L'EDUCATION MORALE DE L'HOMME.

L'intérêt du Clergé comme celui de tous les Corps change selon les Lieux, les tems & les circonstances. Toute morale dont les principes sont fixes, ne fera donc jamais adoptée du Sacerdoce. Il en veut une dont les préceptes obscurs, contradictoires & par conséquent variables, se prêtent à toutes les positions diverses dans lesquelles il peut se trouver.

Il faut au Prêtre une morale arbitraire qui lui permette de légitimer aujourd'hui l'action qu'il déclarera demain abominable.

Malheur aux Nations qui lui confient l'éducation de leur citoyens ! il ne leur donnera que de fausses idées de la Justice : & mieux vaudroit ne leur en donner aucune. Quiconque est sans préjugés est d'autant plus près de la vraie connaissance, & d'autant plus susceptible de bonnes instructions. Mais où trouver de telles instructions ? dans l'histoire de l'homme, dans celles des Nations, de leurs loix, & des motifs qui les ont fait établir. Or ce n'est pas dans de pareilles sources que le Clergé permet de puiser les principes de la justice. Son intérêt le lui défend. Il sent

DE L'HOMME (OEUVRES COMPLETES DE 1781)
『人間論』(『全集』Ho1781α)

SECTION X CHAPITRE VII (ENTIER) ②

INTERET DU PRETRE, PREMIER OBSTACLE A LA PERFECTION DE L'EDUCATION MORALE DE L'HOMME.

Nous avons vu que

L'intérêt du clergé, comme celui de tous les corps, change selon les lieux, les temps & les circonstances. Toute morale dont les principes sont fixes, ne fera donc jamais adoptée du sacerdoce. Il en veut une dont les préceptes obscurs, contradictoires & par conséquent variables, se prêtent à toutes les positions diverses dans lesquelles il peut se trouver.

Il faut au prêtre une morale arbitraire qui lui permette de légitimer aujourd'hui l'action qu'il déclarera demain abominable.

On ne trouve de bonnes instructions que dans l'histoire de l'homme, dans celles des nations, de leurs loix, & des motifs qui les ont fait établir. ce n'est pas dans de pareilles sources que le clergé permet de puiser les principes de la justice. Il sent

DE L'HOMME (OEUVRES COMPLETES DE 1795)
『人間論』(『全集』Ho1795α)

SECTION X, CHAPITRE VII (ENTIER) ③

INTERET DU PRETRE, PREMIER OBSTACLE A LA PERFECTION DE L'EDUCATION MORALE DE L'HOMME.

Nous avons vu que

L'intérêt du clergé, comme celui de tous les corps, change selon les lieux, les temps et les circonstances. Toute morale dont les principes sont fixes, ne fera donc jamais adoptée du sacerdoce. Il en veut une dont les préceptes, obscurs, contradictoires et par conséquent variables, se prêtent à toutes les positions diverses dans lesquelles il peut se trouver.

Il faut au prêtre une morale arbitraire qui lui permette de légitimer aujourd'hui l'action qu'il déclarera demain abominable.

On ne trouve de bonnes instructions que dans l'histoire de l'homme, dans celles des nations, de leurs loix, et des motifs qui les ont fait établir. Ce n'est pas dans de pareilles sources que le clergé permet de puiser les principes de la justice. Il sent

訳訳:『人間論』(初版Ho1773α)
(下線=『全集』Ho1781α・『全集』Ho1795αとの異文)

第10篇第8章(全文) ④

聖職者の利益。人間の道徳教育を改善することに対する第一の障害。

これまで私たちが考察したように、 あらゆる団体の利益と同じく、聖職者の利益も、場所、時間、環境に応じて変化する。したがって、確乎とした原理を有するいかなる道徳も、聖職者団体はけって受け入れないであろう。教義が曖昧で矛盾に満ち、それゆえ融通無難であれば、直面するさまざまな状況にいつでも適用しうるので、聖職者団体はそうした教義から成る道徳を敬する。

今日正当と認定した行為を、唾棄すべきものと明日宣告できる恣意的な道徳が、聖職者には必要である。

■ 聖職者に公民の教育を委ねる国民は不幸である！彼らは正義に関する虞妄の概念しか市民に授けない。なんの概念も授けないほうが、まだましであろう。偏見に染まっていなければ、真の教義にそれだけ近く、また優れた教育をそれだけ受け入れ易い。だが、それはどこに見出せるか。 **■**

優れた教育は人間の歴史と諸国民の歴史のなかに、また諸国における法律の歴史や法律を定めた事由の歴史のなかに見出せる。ただし、そのような源泉から正義の原理を引き出すことを、聖職者は許さない。

■ 彼らの利益がそれを禁ずる。 **■**

DE L'HOMME (PREMIERE EDITION DE 1773)
『人間論』(初版 Ho1773α)

qu'éclairés par cette études, les Peuples mesureroient l'estime ou le mépris dû aux diverses actions sur l'échelle de l'utilité générale. Et quel respect alors auroient-ils pour les Bonzes, les Bramines & leurs prétendus saintetés ? que fait au public leurs macérations, leur haire, leur aveugle obéissance ? toutes ces vertus monacales ne contribuent en rien au bonheur national. Il n'en est pas de même des vertus d'un citoyen, c'est-à-dire, de la générosité, de la vérité, de la justice, de la fidélité à l'amitié, à sa parole, aux engagements pris avec la société dans laquelle on vit. De telles vertus sont vraiment utiles. Aussi nulle ressemblance entre un Saint & un citoyen vertueux.

Le Clergé pour qu'on le croie utile, prétendrait-il que c'est à ses prières, que c'est aux effets de la grâce que les hommes doivent leurs probités ? L'expérience prouve que la probité de l'homme est l'oeuvre de son éducation : que le Peuple est ce que le fait la sagesse de ses Loix : que l'Italie moderne a plus de foi & moins de vertus que l'ancienne, & qu'enfin c'est toujours au vice de l'administration qu'on doit rapporter les vices des particuliers.

Un gouvernement cesse-t-il d'être économe ? s'endette-t-il, fait-il, de mauvaises affaires ? comme le prodigue, commence-t-il par être dupe ? il finit par être fripon. Les Grands en qualité de forts s'y croient-ils tout permis ? sont-ils sans justice & sans paroles ? sous ce gouvernement, les peuples sont sans mœurs. Ils s'accoutument bientôt à compter la force pour tout & la justice pour rien.

C'est à l'aide d'un catéchisme moral, c'est en y rappelant à la mémoire des hommes, & les motifs de leur réunion en société, & leurs conventions simples & primitives qu'on pourroit leur donner des idées nettes de l'équité. Mais plus ce catéchisme seroit clair, plus la publication en seroit défendue.

DE L'HOMME (OEUVRES COMPLETES DE 1781)
『人間論』(『全集』Ho1781α)

qu'éclairés par cette études, les peuples mesureroient l'estime ou le mépris dû aux diverses actions sur l'échelle de l'utilité générale. Et quel respect alors auroient-ils pour les Bonzes, les Bramines & leurs prétendus saintetés ? que feroient au public leur macérations, leur haire, leur aveugle obéissance & toutes ces vertus monacales ne contribuent en rien au bonheur national ? Il n'en est pas de même des vertus d'un citoyen, c'est-à-dire, de la générosité, de la vérité, de la justice, de la fidélité à l'amitié, à sa parole, aux engagements pris avec la société dans laquelle on vit. De telles vertus sont vraiment utiles. Aussi nulle ressemblance entre un Saint & un citoyen vertueux.

Le clergé pour qu'on le croie utile, prétendrait-il que c'est à ses prières, que c'est aux effets de la grâce que les hommes doivent leurs probités ? L'expérience prouve que la probité de l'homme est l'oeuvre de son éducation ; que le peuple est ce que le fait la sagesse de ses loix ; que l'Italie moderne a plus de foi & moins de vertus que l'ancienne, & qu'enfin c'est toujours au vice de l'administration qu'on doit rapporter les vices des particuliers.

C'est à l'aide d'un catéchisme moral, c'est en y rappelant à la mémoire des hommes & les motifs de leur réunion en société, & leurs conventions simples & primitives, qu'on pourroit leur donner des idées nettes de l'équité. Mais plus ce catéchisme seroit clair, plus la publication en seroit défendue.

DE L'HOMME (OEUVRES COMPLETES DE 1795)
『人間論』(『全集』Ho1795α)

qu'éclairés par cette étude, les peuples mesureroient l'estime ou le mépris dû aux diverses actions sur l'échelle de l'utilité générale. Et quel respect alors auroient-ils pour les Bonzes, les Bramines et leur prétendus saintetés ? que feroient leurs macérations, leur haire, leur aveugle obéissance & toutes ces vertus monacales ne contribuent en rien au bonheur national ? Il n'en est pas de même de vertus d'un citoyen, c'est-à-dire, de la générosité, de la vérité, de la justice, de la fidélité à l'amitié, à sa parole, aux engagements pris avec la société dans laquelle on vit. De telles vertus sont vraiment utiles. Aussi nulle ressemblance entre un saint et un citoyen vertueux.

Le clergés pour qu'on le croie utile, prétendrait-il que c'est à ses prières que les hommes doivent leurs probités ? L'expérience prouve que la probité de l'homme est l'oeuvre de son éducation, que le peuple est ce que le fait la sagesse de ses loix, que l'Italie moderne a plus de foi et moins de vertus que l'ancienne, et qu'enfin c'est toujours au vice de l'administration qu'on doit rapporter les vices des particuliers.

C'est à l'aide d'un catéchisme moral, c'est en y rappelant à la mémoire des hommes et les motifs de leur réunion en société, et leurs conventions simples et primitives, qu'on pourroit leur donner des idées nettes de l'équité. Mais plus ce catéchisme seroit clair, plus la publication en seroit défendue.

試訳：『人間論』(初版Ho1773α)
〔下線＝『全集』Ho1781α・『全集』Ho1795αとの異文〕

なぜなら、そうした勉学によって人民が明明的になれば、さまざまな行為への称讃や鄙視が、一般利益という尺度に基づいてなされる、と聖職者は感ずる。そのような時にインドや日本の坊主、婆羅門の僧侶、さらには聖徳と称されるものが、どんな尊敬を受けるか。彼らの苦行、禁欲、盲従が **■** 公衆に **■** どう役立つのか。それら修道士のいかなる徳も、国民の福祉になんら寄与しない **□** のではないか **□**。公民としての徳、すなわち寛大な心、真理と正義の尊重、情愛や言辭への誠実さ、社会的な約定への忠節は違ふ。これらの徳は真に有益なものである。したがって、聖者と有徳な公民の間にはいかなる類似性もない。

有益であると聖職者が一般から信用されるとしても、人々に役立つ己れの徳性を祈禱や思慮に由来すると、みずから主張できるのか。人間の徳性は教育の所産であること、人民は国法の良否を反映すること、古代イタリヤと較べて現代イタリヤにはより多くの信仰とより豊かな徳が存在すること、かつまた個人の邪悪はつねに行政の欠陥から発生することは、経験が実証するところである。

■ 政府が節儉をやめたとして。負債が増ったとき、悪事と企てないであろうか。浪費家と同じく、そうした政府も初めは他者に騙され、ついには他者を欺きはしないであろうか。強者という資格において権力者は、己れにはすべてが許されると信じ込む。そして、正義をも誓約をも購みにじる。そうした政府のもとでは人民も道義をなおざりする。まもなく彼らも力を全能とみなし、正義を無益と考える。 **■**

一種の道徳問答書を用いるならば、すなわち社会的な結合の契機や原初の単純な契約を人々の服従に刻ませるならば、公正という明確な観念を培うことが可能である。とはいえ、このような道徳問答書が明快であればあるほど、それを刊行することは禁止される。青少年の教師として道徳問答書が前提とするのは、

DE L'HOMME (PREMIERE EDITION DE 1773)

『人間論』(初版 He1773α)

Ce catéchisme supposeroit pour instituteur de la Jeunesse des hommes instruits dans les connaissances du droit naturel, du droit des gens & des principales Loix de chaque Empire. Or de tels hommes transporteroient bientôt à la puissance temporelle la vénération conçue pour la spirituelle. Les Prêtres s'opposeroient donc toujours à la publication d'un tel Ouvrage, & leurs criminelles oppositions trouveront encore des approbateurs. L'ambition sacerdotale se permet tout : elle calomnie, elle persécute, elle aveugle les hommes, & paroît toujours juste aux yeux de ses partisans.

Reproche-t-on au Moine son intolérance & sa cruauté : il répond que son état l'exige, qu'il fait son métier. Est-il donc des professions où l'on ait le droit de faire le mal public ? s'il en est, il faut les abolir. Tout homme n'est-il pas citoyen avant d'être citoyen de telle profession ? s'il en étoit une qui pût excuser le crime, à quel titre eût-on puni Cartouche ? il étoit chef d'une bande de brigands. Il voloit, il faisoit son métier.

Le Clergé n'a donc pas le droit, mais le pouvoir de s'opposer à la perfection de la partie morale de l'éducation.

Déjà les Prêtres redoutent un changement prochain dans l'instruction publique. Mais leur crainte est panique. Qu'on est loin encore d'adopter un bon plan d'éducation ! les hommes seront encore longtemps stupides. Que l'Eglise Catholique se rassure donc & croie qu'en un siècle aussi superstitieux, ses Ministres conserveront toujours assez de puissance pour s'opposer efficacement à toute réforme utile.

La nécessité seule peut triompher de leurs intrigues, peut opérer un changement desirable, mais inexécutable sans la faveur, la protection & le concours des gouvernemens.

SOURCES: Hh1773α, tome II, pp. 663-669.

cf. Hh1989, tome II, pp. 913-916.

DE L'HOMME (OEUVRES COMPLETES DE 1781)

『人間論』(『全集』 He1781α)

Ce catéchisme supposeroit pour instituteur de la jeunesse des hommes instruits dans les connaissances du droit naturel, du droit des gens & des principales loix de chaque empire. Or de tels hommes transporteroient bientôt à la puissance temporelle la vénération conçue pour la spirituelle. Les prêtres s'opposeroient donc toujours à la publication d'un tel ouvrage ; & leurs criminelles oppositions trouveront encore des approbateurs.

La nécessité seule peut triompher de leurs intrigues, peut opérer un changement desirable, mais inexécutable sans la faveur, la protection & le concours des gouvernements.

SOURCES: Ho1781α, tome II, pp. 465-466.

DE L'HOMME (OEUVRES COMPLETES DE 1795)

『人間論』(『全集』 He1795α)

Ce catéchisme supposeroit pour instituteur de la jeunesse des hommes instruits dans la connaissance du droit naturel, du droit des gens et des principales loix de chaque empire. De tels hommes transporteroient bientôt à la puissance temporelle la vénération conçue pour la spirituelle. Les prêtres le souffriront-ils.

SOURCES: Ho1795α, tome III, pp.121-125.

cf. Ho1967, tome XI, pp.121-125.

訳訳: 『人間論』(初版He1773α)

(下線=『全集』He1781α・『全集』He1795αとの異文)

自然法。万民法。各国の基本法に通曉した人物である。とはいえ、そうした人物は従来教者に向けられた崇敬を俗権へと転換するであろう。⊗ したがって、聖職者はそうした著作の出版にいつでも反対し、彼らの強硬的な妨害が依然として粉微を受取る。聖職者団体の野望がすべてをほしのままにさせる。それは迫害を加え、人々に盲目にしながら、なおかつ世間の眼にはいつも正当なものと映ずる。 ⊗ 聖職者がそれに耐えられるか。

⊗ 修道士に不寛容を引継ぎしてみよう。彼は応える。自分の身分にはそれが欠かせない、自分の職務を遂行するだけだ。と、しからは権利として公の悪事を為しうる職務が、存在するだろうか、存在するならば、廃止すべきである。職務を帯びた公民である以前に、すべての人間は公民そのものではないか、みずからが犯罪を許容する公民であるとき、どんな名目でカルトウーシュを処罰できるのか、彼は空想國の首領であった。カルトウーシュも盗みも働き、己れの職務を遂行したのである。■

⊗ したがって、権利ではなく、権力によって聖職者は道徳教育の改善を妨げるだけである。■

⊗ 公教育の変革が間近であることを、すでに聖職者は怖れている。しかし、その怖れは狂気じみたものである。優れた教育の模範を採用するのに、人々はまだなんと躊躇い！人類はまだながく愚かであるう。それゆえ、カトリック教会はいまも自信を失っておらず、つぎのように信ずる。すなわち、迷信的な世紀が今後なお続き、そこでもあらゆる有益な改革を極力妨げるため、充分な権力をつねに保持できる。と。■

⊗ 必要だけが聖職者の策謀に打ち勝ち、望ましい変化を作業させる。だが、こうした変化は政府の賛同、庇護、協力なしには遂行されない。⊗

cf. エニネ1966, pp. 173-177.

- 1) SMITH, D. W., A Reprint of Helvétius's Oeuvres. in Zeitschrift für Französische Sprache und Literatur, Band LXXXI, pp. 267-275.
- 2) SMITH, A Preliminary Bibliographical List of Editions of Helvétius's Works. dans Australian Journal of French Studies, volume VII (1970), No. 3, pp.327-328. 以下この論文をSaと略記する。
D'ALEMBERT, J., Correspondance avec le Roi de Prusse le 22 août 1772. dans D'ALEMBERT, Oeuvres complètes, Genève, Slatkine Reprints, 1967. tome V, p.328.
- 3) CUMMING, I., Helvetius, his Life and Place in the History of Educational Thought, London, 1955. p.238. Sa, pp. 333-334.
- 4) Hh1773 α , page de titre. CLEMENT, F., La Société typographique 1768-1788. dans La Grave, No.86 (mai 1955), pp.3-9.
なお、ロビネは老舗の同業者レーに1773年2月25日下記の手紙を送った。「エルヴェシウス殿の遺文をぜひ拝見したく存じます。写しを入手され次第、当方にお送りくだされば幸いです。その遺文は私たちの書物の付録となるでしょう。ご逝去の8日前に殿は手稿から2百箇条ほどの要約を作ると私に約束されました。」(ROBINET, J.-B., Lettre à Rei. cité dans Sa, p.33.)
- 5) Sa, pp.334. TOURNEUX, M., Diderot et Catherine II, Paris, 1899. pp.63-64.
- 6) Ibid.. pp.64-67. DIDEROT, D., Lettre à Madame D'Epinau du 18 août 1773. dans DIDEROT, D., Correspondance, Paris, 1970. tome XIII, pp.46-47.
ゴリーチン邸に滞在するディドロが「人間論序文」を書いたとの風評も流れた。なお、この書翰で語られた覚書が、大著『〈人間論〉への反駁』を執筆する端緒となる。
- 7) AIGUILLON, E. A., Dépêche à Durand Distoff du 19 octobre 1773. cité dans TOURNEUX, op. cit.. pp.67-68.
- 8) TOURNEUX, op. cit.. pp.68-70.
- 9) Sa, pp.302-311, 333-342.
ただし、ここに掲げる『人間論』刊行一覧では抜粋本と翻訳書を除外した。
- 10) BESSE, G., Introduction. dans HELVETIUS, De l'Esprit, Paris, 1959. p.64. SMITH, La Correspondance d'Helvétius. dans Dix-huitième Siècle, volume V (1973), p.335.
- 11) KEIM, A., Helvétius, sa vie et son oeuvre, Paris, 1907. p.4. BESSE., op. cit.. p.6.
- 12) LA ROCHE, L., Avertissement. dans H01795, tome I, pp.vij-jx.
- 13) GUILLOIS, A., Le Salon de Madame Helvétius, Cabanis et les Idéologues, Paris, 1894. pp. 23-24, 36-38, 148-150.
- 14) Anonyme, Avis de l'éditeur. dans H01818, p.vj. QUERARD, J.-M., La France littéraire, ou dictionnaire bibliographique, Paris, 1830. tome IV, p.60.
- 15) SMITH, Helvétius - problèmes de recherches. dans Revue de l'Université de Bruxelles, 1972, No. 1, pp.144-156.
以下この論文をShと略記する。
- 16) Ibid., p.152.
- 17) DIDEROT., Réfutation suivie de l'ouvrage d'Helvétius intitulé, l'Homme, dans Oeuvres complètes, éd. Lewinter, Paris, 1971. tome XI, p.481.
- 18) Arrêt du 10 janvier 1774, condamnant au feu deux brochures, l'une: le Bon Sens . . . , et l'autre: De l'Homme . . ., Paris, 1774. pp.1-4.
ROCQUAIN, F., L'Esprit révolutionnaire avant la Révolution, Paris, 1878. pp. 307-308.
- 19) GUILLOIS, op. cit., pp.71-74, 88, 91, 103-105.
- 20) Sh, pp.146-149, 154-155.

ISSN 0916-314X

フランス教育学会紀要

第3号

BULLETIN DE L'ASSOCIATION
JAPONAISE DE RECHERCHE
SUR L'EDUCATION EN FRANCE

フランス教育学会

1991年

総目次		1
特別寄稿		
日本におけるフランス研究のはじめ	波多野完治	5
Education aux Droits de l'Homme : le retour des valeurs	ジャック クリソ	12
研究論文		
エルヴェシウス著「人間論」の刊行と改竄		
—書誌学上の諸問題とその政治的・国際的背景—	永治日出雄	21
コンドルセ公教育論における初等「普通教育」の検討		
—女性教育の位置付けを中心として—	荻路 眞司	33
教師の過失責任と中立性		
—モリゾー事件を手がかりに—	高津 芳則	45
フランス第3共和制期における母親学校のアクセス制度改革	藤井 穂高	57
アンリ・ワロンの教育観と発達観の関連を考察するための視座の提起		
—トラン・トンのワロン解釈への批判—	西岡けいこ	69
両大戦間統一学校論の研究		
—「公教育省統一学校委員会報告書」の特質と意義—	大坂 治	79
エスプリ運動の教育構想	千葉 泰爾	91
研究情報		
<フランス教育学会科研費共同研究の概要>		
フランスの道徳・公民教育に関する総合的研究	石堂 常世	105
フランスにおける情報化社会への教育的対応に関する総合的研究	山田 達雄	107
1990年のフランスの教育の動き	夏目 達也	109
<書評>レ・タン・コイ著, 前平泰志・田崎徳友・吉田正晴・西之園晴夫訳	晴夫 訳	
「比較教育学—グローバルな視座を求めて」	村田 翼夫	111
<会員の研究成果紹介>		
フランスにおける優秀児と遅進児の教育指導の特性		
—個性重視の教育を中心に—	手塚 武彦	113
筑波大学所蔵：フランス教育史コレクション（抄）	岡芹 愛子	114
1990年度の会務報告		126
1990年度の大会報告		127
紀要刊行規定, 編集委員会誌		128
投稿規定		129
役員リスト		130
編集後記		130